



アッシジの聖フランチェスコによる「小鳥への説教」(画：ジョット、1305年頃)

メシアンと鳥たち

藤田 茂

読響は2017年11月、創立55周年の一大プロジェクトとして、メシアン(1908～92)唯一の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉に常任指揮者カンブルランと挑みます(演奏会形式・全曲日本初演)。本公演に向けて、本誌ではメシアンに関する特集を「アッシジへの道」として連載しています。第4回の今回は、メシアンが音楽のなかに多用した「鳥の声」について、その経緯や作曲方法などを紹介します。(編集部)

芸術が都市のものとなって以来、都市の向こうにある大自然への憧憬は、芸術のテーマとして欠かせないものとなってきた。そして鳥たちは、この大自然を表す古来、おなじみのシンボルである。なかでも音楽家は、鳥たちの鳴き声を、それぞれのやり方で自分の音楽のなかに取り込み、大自然を感じさせようとしてきた。ベートーヴェンの〈田園〉交響曲はよく知られた例であるが、そのずっと前から、また、そ

のずっと後にも、音楽家は同じことをしてきた。20世紀を生きたメシアンもまた、この伝統を受け継いでいる。メシアンが好んだ神学議論は、詩的かつ私的なもので、どこか近づきがたい。けれども鳥を通してであれば、メシアンの音楽はぐっと身近に感じられるのではなかろうか。かつて哲学者の下村寅太郎^{とらたろう}が、鳥たちへの説教の逸話を通して、アッシジの聖フランチェスコに近づいたように。

始まりは「鳥のように」

では、メシアンと鳥たちとの関係は、いつ始まったのだろうか。メシアンの語るところによれば、母セシル・ソヴァージュの胎内にいる頃からである。実際、ソヴァージュは、メシアンを宿しつつ執筆した詩集『芽生える魂』において、やがて生まれてくる息子をこう歌っている。「わたしのなかで東洋がうたう／青い鳥たち、蝶々たちも」。そして同じくメシアンの語るところによると、彼は3歳にして、鳥たちのさえずりに耳を傾けるよう、両親に静粛を求めたという。

しかし、音楽家としてのメシアンが最初に鳥たちに向き合ったのは、16歳前後と見てよい。すでにパリ音楽院の学生であったメシアンは、夏の休暇を、叔母たちのいるオーブ県フリニーで過ごすようになっていた。そして、美しい平原の広がるこの村で、鳥たちの鳴き声を試みに五線譜に書き取り始めた。とはいえ、メシアンはこう考えてもいた。「鳥たちは、半音以下の調律されない音程を用いているし、自然をただコピーするのは馬鹿げてもいる」。だから、最初の採譜の試みから20年以上の間、鳥の鳴き声を自作品に活用するにしても、メシアンは「鳥を思わせる旋律」を装飾的に用い

るのみだった。

実際、〈世の終わりのための四重奏曲〉(1941)や〈トゥーランガリラ交響曲〉(1948)の自作解説において、メシアンがクロウタドリやサヨナキドリ、ヒバリなどに言及することがあったとしても、それらはすべての鳥たちのシンボルとしてであり、楽譜上では、ただ「鳥のように」と記されるに留まる。

再現的リアリティーを求めて

ところが、1950年代に入るとメシアンの鳥たちに向かう姿勢に、大きな変化が起こる。彼は、鳥たちの鳴き声を活用するのに、いっそうの再現的リアリティーを求め始めたのだ。きっかけは、アマチュア鳥類学者のジャック・ドラマンとの出会いだった。コニャックの醸造家でもあった彼は、フランス南西部のシャラント県ブランドレ・ド・ガルデペに広大な庭を有する邸宅を構えており、メシアンが思う存分鳥の鳴き声を聴くことができるよう取り計らうとともに、鳴き声で鳥を識別する術を彼に手ほどきした。

結果、〈鳥たちの目覚め〉(1953)から、メシアンの音楽のなかに特定の鳥の鳴き声を模写する音楽が、楽譜上で特定の鳥の名前を伴って現れ始める。

そして、メシアンはその後、鳥類学者随伴で、最初はフランス各地を、後には（自作が演奏される機会を利用して）世界中を巡り、鳥たちの鳴き声をコレクションしていく。そのなかには日本も含まれており、〈七つの俳諧〉（1962）では、わたしたちにも馴染みのあるウグイスやホトトギスが登場する。

そうすると、楽器法にも必然的に変化が現れる。鳥たちの鳴き声が「鳥のような」装飾旋律であったときには、周囲との調和を乱さない限りで、任意の楽器に特定の線を奏させればよかった。しかしこうして、あの鳥、この鳥が、はっきりと模写されるようになると、メシアンは、もとの鳥の鳴き声の音色まで正確に再現する必要を感じ始めたのである。

しかし、そこにもはや、絶対的な解は存在しない。メシアンは、鳥の音色を再現するのに、ピアノではその時々で新たな複合音を考案し、管弦楽では、さらにあらゆる楽器の組み合わせを試みる。ガムランを思わせるやり方で同系の打楽器を組み合わせることもあれば、木管群、金管群、弦楽群を独立させて用いることもあれば、金管の核を弦楽で覆うこともある。つまり、鳥の数だけ、そこにある音の数だけ、違った解が導き出されたのであった。

組み合わせの方法

こうしてメシアンの鳥たちは、いまや装飾的な旋律に留まることなく、自律した音楽ユニットの性格を示すようにもなるが、そうすると今度は、これら鳥のユニットをいかに組み合わせるか、という問題に突き当たることになった。ここでは、大きく二通りの方法が考えられた。

ひとつは〈鳥のカタログ〉（1956～58）に代表される、「生態系」をまるごと写し取る方法。音楽家＝鳥類学者としてのメシアンの大きな発見は、同じ種類の鳥でも、生息地によって鳴き声に違いがあることだった。そのため、〈鳥のカタログ〉におけるメシアンは、ある土地の鳥の鳴き声を、実際に聞いた組み合わせで、実際に聞いた時間的な順序に従って再現しようとする。しかも、山脈や岩場、湖など、鳥たちを取り巻く環境を表現する音楽とともに。

もうひとつは〈異国の鳥たち〉（1956）に代表される、音楽的な組み合わせを自由に構築する方法。メシアンは鳥類学研究のなかで、鳥たちの鳴き声が、生息地・生息環境と切り離されてサンプリングされたレコードを手にした。これを採譜する経験が、〈異国の鳥たち〉のメシアンを、鳥たちの鳴き声の



アッシジの風景

自由な組み合わせへと向かわせた。しかも、鳥たちとは本来、無縁であるギリシアの韻律にもとづくリズム・セクションとともに。

もちろん両者は、すぐに相互に浸透し始める。〈アッシジの聖フランチェスコ〉におけるメシアンは、アッシジという土地の固有性を生かし、アッシジで採譜した鳥たちの鳴き声を大いに活用するとともに、地理的にはずっと離れたところにある、例えばニューカレドニアで採譜した鳥たちの鳴き声をここに参加させもする。

鳥たちの耳で

以上、メシアンと鳥たちとの関わりを、その発展変化も含めて概説してきた。最後に、よく聞かれる不平について、少しだけ。「メシアンの再現する鳥は、鳥に聞こえない」。さもあらん、である。しかし、これに賛成するでも

反対するでもなく、ひとつの体験を記しておきたい。

鳥たちは、実はわたしたちの予想を超えた猛スピードで、その声を発している。メシアンに関するある講演のなかで、フランソワ＝ベルナル・マッシュュが、鳥の鳴き声の録音を、再生速度をかなり落として聞かせてくれたことがあった。マッシュュの講演のトーンは、どちらかといえば批判的なものであったが、彼はこの「遅回し」によって、鳥たちが、普通わたしたちが知覚している鳴き声のなかに、さらに小さな鳴き声を隠していることを教えてくれた。そして、その鳴き声は、メシアンの再現する鳥の鳴き声とよく似ていた。

メシアンの聴覚は、普通の人間の聴覚的限界を超えたところで、鳥の鳴き声を捉えているらしい。いわば、鳥の耳で鳥の鳴き声を聴いている。そこには人間の耳で捉えるのとは違った世界が広がっているのかもしれない。

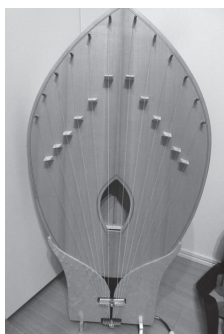
次回は7月号に掲載します

オンド・マルトノって どんな楽器？

大矢素子 (おおや もとこ)

オンド・マルトノ奏者

オンド・マルトノ……この一風変わった楽器の名前をご存知の方は、どのくらいいらっしゃるだろうか。頭のないか「音頭丸殿」と漢字変換してしまうかもしれない。それくらいマイナーな楽器であると理解している。オンド・マルトノは今から100年くらい前にフランスで考案された電子楽器である。その姿形は一見小型のオルガン風。しかし、周囲には独特のかたちのスピー



カー (= 写真) が並ぶ。アクリル素材のお洒落な譜面台からは、アール・デコの時代の美意識が伝わってくる。

この楽器を考案したのは、モリス・マルトノという電気技師でチェロ奏者でもあった。第一次世界大戦時、電気技師として戦地に派遣された彼は、発明されたばかりの無線の音を聴き、音楽を感じたようだ。「この仕組みを利用して、新しい楽器を作ることができ



るのではないか」……戦場の道具が音楽を奏でる楽器へと生まれ変わった瞬間である。

オンド・マルトノの演奏法は、二通りある。鍵盤を弾く方法と、鍵盤の前にはられたワイヤーをスライドさせる奏法。後者では、チェロのような、人の声のような、暖かみのある音が作り出される。メシアンを筆頭に、ジョリヴェ、オネゲル、近藤譲など「現代音楽」がレパートリーである。

電子楽器ではあるが、音の高さや音色を、奏者がリアル・タイムで作り上げねばならない。舞台に置かれた特殊なスピーカー群も、その場の音環境に合わせて音の配分を調整する。このように、複合的な音作りの要素をその場でコントロールすることこそオンド・マルトノ演奏の難しさであり、醍醐味^{だいごみ}であると考え。言葉で説明すればするほど謎が深まるであろう、この楽器。フランスの音楽美学者ジゼル・ブルレが「魂を奏でる電子楽器」と評したその音を、ぜひ生で体感していただきたい。

* 11月公演ではヴァレリー・アルトマン＝クラヴリー、大矢素子、小川遥の3人が演奏します。

心に残るクラシック

岸田 繁 ①

Shigeru Kishida

ポップなクラシック

すぎやまこういち：ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団による 交響組曲〈ドラゴンクエスト〉I～VII



私がクラシック音楽に本格的にのめり込むきっかけになったのは、すぎやまこういち氏の作品交響組曲〈ドラゴンクエスト〉シリーズでした。これらの作品は、1980年代半ばから現在に至るまで氏が取り組まれている管弦楽曲作品集です。

当時ファミコンに夢中だった私は、他の子供達と同じように時間を忘れてゲームに熱中していました。両親の影響で映画好きだった私にとって、映像やドラマを通して聴こえてくる音楽が、心の中に染み込んでいくことが多かったように思います。

ゲームでは最大3和音の内蔵音源でした（それでも世界観がしっかりと描かれています）が、オーケストラ用に編曲された氏の音楽はロックやポップスとは違うカタルシスを放っており、私はそれを夢中で聴きました。大人になってから改めて楽曲を聴いてみると、数多くの音楽的要素がバランス良

く混在していることが分かります。

一度氏にお会いする機会があり、どのようにして作曲されているのか、ということ伺いました。

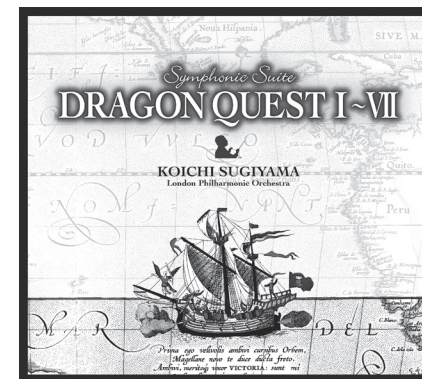
〈ドラゴンクエスト〉シリーズは中世ヨーロッパの騎士物語、というコンセプトなので、ワグナー的な序曲、バロック時代を想起させる室内楽、不思議な神殿で流れる宗教的な音楽……と、ゲームの場面に応じたテーマを決めて作曲するとおっしゃっていました。そして、初期のゲーム機は3和音しか出力できなかったのも、骨組みだけでメロディー、リズム、ハーモニーがバランス良く聴こえるように、対位法的な技術やアルペジオを巧みに使用することが求められたようです。

様々なシーンで鳴らされる多様な楽曲にはバロックから近代まで多彩な要素が見え隠れします。12音技法的な要素や、無調音楽的な要素まで聴こえてきます。技術だけではなく、ゲーム

の世界観に対してしっかりとコンセプトを持って取り組まれていることが分かります。

私も含め当時の子供達はそんな知識があるわけもなく、ゲームに夢中になる傍ら、氏の音楽を長時間聴いてきたわけですから、今改めて考えるととてもないことだな、と思ったりもするのですが、多くの優れたポップスや歌謡曲を作った氏のメロディーはとても口ずさみやすいものです。そのメロディーを活かす氏の巧みなセンスによって、クラシック音楽が持つ色々な要素が、子供達の耳にしっかり響いているのだと思います。これを名付けるなら、これこそ「ポップ」な音楽だと思ったりもします。モーツァルトやビートルズのように。

私はクラシック音楽好きの友人とすぎやま氏のことを話す時に、「世界音楽」という言葉を使います。つまり、非常にエクレクティック（越境的）なものであるということです。〈ドラゴンクエスト〉シリーズで彼が使う技法は、いわゆるバロックから近現代のクラシック技法まで多岐に及びますが、かつて武満徹氏やベラ・バルトーク氏がそうであったように、大文字の「クラシック音楽」、つまりウィーンで18世紀以降に発展していった管弦楽音楽を下敷きに、世界中の民俗音楽を収集し、独自のメロディーセンス、そしてそれを活かす



CDジャケット ©SUGIYAMA KOBO

ための「非クラシック的な」メロディーとリズム、そして何よりもそれらを活かす意識的なハーモニーを使います。

特徴的な和声進行（II→V）や響き（m7-5）など、巧みに取り入れられたジャズ的な技法をベースに、日本人にとって馴染み深い「歌謡曲的」メロディーを昇華させるテクニックは、他の作曲家に類をみないものだと思っています。

小難しい話はここまでにして、私が真摯に思うことは、氏の音楽の素晴らしさを語る際に鍵となるのは、インプットもアウトプットも、とにかく敷居が低いということです。にもかかわらず、音楽の中身は抜群のセンスとユーモア、そして幅広い世界観と歌心に溢れているということです。

profile きしだ・しげる

1976年京都市生まれ。ロックバンド・くるりのボーカル、ギター／作曲家。2016年4月より京都精華大学の客員教員に就任。12月にロームシアター京都コンサートホールで開催された、自身作曲による初の交響曲の世界初演がCD化、絶賛発売中。www.shigerukishida.com

◎コンサートマスター

萩原尚子

Naoko Ogihara

読響は柔軟で力強い
自然体でいきます

《4月から読響のコンサートマスター。雰囲気はいかがですか》

何度かエキストラとして弾かせてもらいましたが、柔軟なオーケストラというイメージがあります。楽員の皆さんもフレンドリーで、一緒に演奏しよう、ハーモニーをつくろうという気持ちを感じられるオーケストラです。音楽が力強いと感じられるのは男性が多いからでしょうか。

《萩原さんは愛知県豊田市出身。4歳からヴァイオリンをスズキ・メソッドで始める。ベルリン芸術大学で教えていた豊田耕児こうじさんのレッスンを受けたことが音楽家への道を決定づけた》

私は小さい頃から、ヴァイオリンを弾いて、だれかに聴いてもらうのが楽しかった。自宅では、母が料理している側で練習するのが好きでした。それが中学2年生の時、豊田先生の公開レッスンを受けて、音楽ってこういうものなのかとその深さを思い知らされました。曲はサラサーテのカルメン幻想

曲でした。高校生になって進路を決める時、再び豊田先生のレッスンを受ける機会があり、凄く刺激的、衝撃的で、何としても先生のもとで勉強したいと思い、「習いたいです」と告白しました。

先生の音楽でとても好きなのは「間」です。音楽の間。学生時代の楽譜には、「ま」とたくさん書き込んでいます。その「ま」は、時には緊迫感をもったものになり、時には余韻にもなる魔法のようなものです。また、先生はルバート、つまり揺らす感じを大切にされているので、音楽に余裕と遊びがあるように思います。卒業後も豊田先生には連絡を取らせていただき、今もなお音楽家としての、そして人としての崇高さに導かれています。

《ドイツの大学、大学院で学びつつ、日本でもしばしばリサイタルを開催した。オーケストラとしては、まずマーラー室内管で活躍。2007年にケルンWDR放送響のコンサートマスターに就任した》

学生時代は、ベルリン・フィルをよく聴きに行きました。指揮者はアバドも、ラトルも素晴らしかった。コンサートマスターが例外的に4人いる時代で、4人の全然違うカラーを感じました。楽員たちも緊張しているのでしょ



うけど、真剣さを見せないの、お客さんもリラックスして聴ける。それが生活の一部になっている国なのだなと思いました。余裕があるんですね。

折々に日本に帰り、リサイタルも開いていました。25歳の頃、京都で開いた際、豊田先生が聴きにいらして、後日、その時の厳しい感想をお電話でいただきました。「この間の演奏ね、あんなふうじゃああなた、いい演奏家になれませんよ。自分の好き放題にやっている」。私は豊田先生の言葉には一番傷つくし、一番耳を傾けます。それでかなり考えるようになりました。

オーケストラの経験はなかったので

すが、マーラー室内管に入って基礎を学びました。ハーディングをはじめ素晴らしい指揮者、ソリストと知り合い、影響を受けました。4年間の活動を経て、コンサートマスターのオーディションに応募して合格したのが、ケルンWDR放送響でした。

《コンサートマスターとして心掛けていることは何でしょう》

コンサートマスターである前に音楽家であること。当たり前ですが、作曲家に対して常に謙虚であることです。それは自分の音楽への情熱、意欲につながり、ひいては団員の意欲にもつながるような気がします。

また、大事なことはコミュニケーションです。指揮者は毎回違うし、楽員の皆さんもいろんな心理状況がある。私は失敗したことのほうが多いかもしれません。自分も若かったし、変な自信があったし、負けず嫌いだし。言い過ぎて指揮者や楽員と険悪なムードになったこともあります。そういうのって必要じゃないな、ということが年を取るにつれてわかってきました。「オーケストラを引っ張っていこう」と思えば思うほど、誰もついて来ないんですよ（笑）。自然体でいきます。すぐにぶつからないように、自分をクッションがあるような器にしておきたいと思います。4歳の子がいる家庭の中では難しいですが（笑）。

“炎のマエストロ”小林研一郎が得意のチャイコフスキーを指揮

7/ 1 (土) 14:00 第199回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

7/ 2 (日) 14:00 第199回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲
チャイコフスキー：交響曲 第3番〈ポーランド〉

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）

チェロ：遠藤真理（読響ソロ・チェロ）



小林研一郎



遠藤真理

飯守泰次郎がワーグナーを振り、ピアノの巨匠フレイレが共演！

7/ 7 (金) 19:00 第604回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ブラームス：ピアノ協奏曲 第2番
ワーグナー：舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から第1幕への前奏曲
舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から“聖金曜日の音楽”
楽劇〈ワルキューレ〉から“ワルキューレの騎行”
歌劇〈タンホイザー〉序曲

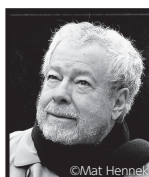
指揮：飯守泰次郎

ピアノ：ネルソン・フレイレ

※ 2017年度の名曲シリーズはサントリーホール改修工事に伴い、
4～9月は東京芸術劇場で開催します。



飯守泰次郎



ネルソン・フレイレ

“古典派のスペシャリスト”が魅せるハイドン&ベートーヴェン

7/12 (水) 19:00 第570回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

ハイドン：歌劇〈真の貞節〉序曲、ホルン協奏曲 第1番
オラトリオ〈トビアの帰還〉序曲、トランペット協奏曲
ベートーヴェン：交響曲 第7番

指揮：鈴木秀美

ホルン&トランペット：ダヴィッド・ゲリエ

※ 2017年度の定期演奏会はサントリーホール改修工事に伴い、
4～9月は東京芸術劇場で開催します。



鈴木秀美



ダヴィッド・ゲリエ

7月 公演の聴きどころ

7月1日、2日の《マチネーシリーズ》は、読響特別客演指揮者の小林研一郎が、得意のチャイコフスキー作品から交響曲第3番〈ポーランド〉を指揮する。“炎のマエストロ”が、ホットにチャイコフスキーの名旋律をうたわせ、聴衆を熱狂の渦へと誘うだろう。ドヴォルザークのチェロ協奏曲では、2017年4月に読響のソロ・チェロ奏者に就任したばかりの若き達人、遠藤真理が独奏を務める。ボヘミアへの郷愁が漂う傑作協奏曲を、美しい音色で表情豊かに歌い上げる。

7日の《名曲シリーズ》では、新国立劇場オペラ芸術監督の飯守泰次郎が、おはこ十八番とするワーグナー作品から〈パルジファル〉〈ワルキューレ〉〈タンホイザー〉の名場面を集め披露する。作品をすみずみまで知り尽くしたベテランが、重厚な響きを作り出し、壮大な音楽ドラマを聴かせてくれるだろう。

また、ブラームスのピアノ協奏曲第2番では、今シーズン屈指の巨匠ソリスト、フレイレが登場する。ブラジル生まれで、ベルリン・フィルなど世界の名だたるオーケストラと共演を続ける名手だ。円熟の極にある深い音色と表現力で、ブラームス全盛期の傑作の奥深い世界をたっぷり味わわせてくれるだろう。《名曲シリーズ》1回だけの登場なので、お聴き逃しなく。

12日の《定期演奏会》は、古典派のスペシャリストである鈴木秀美が、ベートーヴェンの交響曲でも人気の高い第7番などを指揮する。2015年のベートーヴェン交響曲第3番〈英雄〉で大成功を収めた鈴木&読響のコンビが、再び鮮烈な演奏を繰り広げるだろう。前半のハイドンのホルン協奏曲第1番とトランペット協奏曲では、ミュンヘン国際コンクールのトランペット部門で優勝し、フランス国立管の首席ホルン奏者を務めたゲリエが共演。ホルンとトランペット両方をこなす驚異の名手が、天才ぶりを発揮する。

（文責：事務局）

読響チケットWEB

検索

新世代の旗手・鈴木優人が振る〈未完成〉〈運命〉〈新世界〉

8/20 (日) 14:00 読響サマーフェスティバル2017《三大交響曲》
東京芸術劇場コンサートホール

シューベルト：交響曲 第7番〈未完成〉
ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉
指揮：鈴木優人



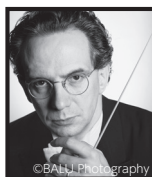
鈴木優人

世界的巨匠ルイーが指揮する R. シュトラウス〈英雄の生涯〉

8/24 (木) 19:00 特別演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

8/25 (金) 15:00 特別演奏会
横浜みなとみらいホール

R. シュトラウス：交響詩〈ドン・ファン〉
ハイドン：交響曲 第82番〈熊〉
R. シュトラウス：交響詩〈英雄の生涯〉
指揮：ファビオ・ルイー



ファビオ・ルイー

世界へ羽ばたく若手ソリスト3人が《三大協奏曲》で競演！

8/28 (月) 18:30 読響サマーフェスティバル2017《三大協奏曲》
東京オペラシティ コンサートホール

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク：チェロ協奏曲
チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番
指揮：海老原光
ヴァイオリン：キム・ボムソリ
チェロ：岡本侑也
ピアノ：ダニール・ハリトノフ



海老原光



キム・ボムソリ



岡本侑也



ダニール・ハリトノフ

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

ポーランドの名匠カスプシクが〈展覧会の絵〉で渾身のタクト

9/1 (金) 19:00 第605回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ヴァインベルク：ポーランドのメロディ 作品47 no. 2
フィリップ・グラス：ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲
ムソルグスキー（ラヴェル編）：組曲〈展覧会の絵〉
指揮：ヤツェク・カスプシク
ヴァイオリン：ギドン・クレーメル チェロ：ギードレ・ディルヴァナウスカイト



ヤツェク・カスプシク

世界的ヴァイオリニストのクレーメルが31年振りに登場

9/6 (水) 19:00 第571回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

ヴァインベルク：ヴァイオリン協奏曲 ショスタコーヴィチ：交響曲 第4番
指揮：ヤツェク・カスプシク ヴァイオリン：ギドン・クレーメル



ギドン・クレーメル

欧州で注目を浴びる新鋭マイスターと天才トリフォノフが共演！

9/16 (土) 14:00 第200回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/17 (日) 14:00 第200回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/18 (月) 祝 14:00 第98回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール



コルネリウス・マイスター

スッペ：喜歌劇〈詩人と農夫〉序曲 プロコフィエフ：ピアノ協奏曲 第2番
ベートーヴェン：交響曲 第6番〈田園〉

指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者） ピアノ：ダニール・トリフォノフ

“チーム長原”が繰り広げる極上のアンサンブル

9/19 (火) 19:30 第15回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00開演

《長原幸太らによる室内楽》

ベートーヴェン：交響曲 第8番（弦楽五重奏版）
ブラームス：弦楽六重奏曲 第1番

ヴァイオリン：長原幸太（コンサートマスター）、瀧村依里（首席） ヴィオラ：鈴木康浩（ソロ・ヴィオラ）、渡邊千春 チェロ：高木慶太、富岡廉太郎（首席/契約団員）



長原幸太

練達のマエストロが振る〈新世界〉&実力派・小山が弾く〈皇帝〉

9/30 (土) 15:00 第6回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：ハンスイェルク・シェレンベルガー ピアノ：小山実稚恵



ハンスイェルク・シェレンベルガー

東京二期会オペラ劇場 歌劇〈ばらの騎士〉

■ 7/26 (水) 18:00 東京文化会館 大ホール
7/27 (木) 14:00 東京文化会館 大ホール
7/29 (土) 14:00 東京文化会館 大ホール
7/30 (日) 14:00 東京文化会館 大ホール

指揮：セバスティアン・ヴァイグレ

演出：リチャード・ジョーンズ

出演：林正子、妻屋秀和、小林由佳、加賀清孝、幸田浩子 ほか (26日、29日)
森谷真理、大塚博章、澤村翔子、清水勇磨、山口清子 ほか (27日、30日)

R. シュトラウス：歌劇〈ばらの騎士〉(原語上演・日本語字幕つき)

[料金] S ¥17,000 A ¥14,000 B ¥11,000 C ¥8,000 D ¥5,000 学生 ¥2,000

[お問い合わせ] 二期会チケットセンター 03-3796-1831

フェスタサマーミュージザ KAWASAKI 2017

爽やかな風、シネマ&ポップス

■ 8/1 (火) 15:00 ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：渡辺俊幸 スペシャル・ゲスト：森山良子

〈サウンド・オブ・ミュージック〉メインテーマ

〈ひまわり〉メインテーマ

〈シェルブールの雨傘〉メインテーマ

〈ティファニーで朝食を〉ムーンリバー

〈ニュー・シネマ・パラダイス〉メドレー

〈スター・ウォーズ〉メインテーマ ほか

[料金] S ¥4,000 A ¥3,000 B ¥2,000

[お問い合わせ] ミューザ川崎シンフォニーホール 044-520-0200

南葵音楽文庫寄託記念

～読売日本交響楽団 和歌山特別公演～

■ 12/6 (水) 19:00 和歌山県民文化会館 大ホール

指揮：川瀬賢太郎 ピアノ：仲道郁代

ネイラー：序曲〈徳川頼貞〉

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第26番〈戴冠式〉

ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

[料金] S ¥3,000 A ¥2,000

[お問い合わせ] 和歌山県民文化会館 073-436-1331

※ チケットは7月29日発売予定